

経済という言葉

—意味・語源・歴史—

馬場 宏二

今日の話は経済という言葉。semantic history という学問分野があるらしいですが、副題でお解かりのように、それに類したものです⁽¹⁾。

1. まず話のスタイル。研究会のつもりでいたら講演会に格上げされてしまった。私の理解では、講演会とは、講師が隔絶して高い知識を持っていて、聴衆の気配を見ながらそれを噛み砕いて説く。聴衆は有り難いお話を承って利口になったと喜んで帰る、といったものですが、今日のテーマでそれができるのは高橋誠一郎⁽²⁾くらいのもので、私は知識量が高橋より二桁くらい下ですから、講演会スタイルはとれない。その代わり好奇心は結構強いので、あれをこう調べた、これはここまで調べたが途中までしか解からなかった、ここはどうしようもなかったから奥の手を使った、などと、研究プロセスの話ならいくらでも出来るし、その方が面白いかも知れない。となると、格上げしてくださった研究所長には申し訳ないが、結局研究会スタイルの研究報告になります。もうひとつ、主題自体の特質で、一見簡単でいながら多少入り込むと結構調べる手間も掛かるし話が曲がったりうねったりする。それを追うわけですから、研究会スタイルで語ることと併せて、皆さんが予想しておられたより時間がよけいに掛かることになる。このことは覚悟してお聞きいただきます。

2. 「一見簡単」のサンプルをやってみましょう。「経済」という語の意味を直感的にスパッと言えといわれると案外簡単で、普通の人には、モノとカネの世界のことだ、と言うと思います。多少膨らませるとして、モノ・カネ、損得、やりくりの世界。これで意味の大部分を述べたことになるし、大抵の人にそのまま通じる。これを、用語が粗野だからもっと高尚な学術用語で言えとか辞書の定義のように厳密に言えとかいわれるとかえって面倒になり、解からなくなる。モノは商品、カネは貨幣と言ひ換えられるし、この部分はその方が良い。ところが、損得となるとどうですか。損は損失、得は利益と一応なりますが、損得の世界という時には、下手をすれば損をするし上手く振舞えば儲かるという悪知恵とダイナミズムを含めているわけですから、単純に損失・利益と言ひ換えて済むものではない。ヤリクリに至っては学術用語でどう呼ぶのかも解からない、といったことになる。それをさらに辞書化しようとするとは悲惨なことになるので、後で『広辞苑』を材料に例示します。というわけで「経済」の意味は「モノカネ、損得ヤリクリの世界の出来事」が良い。簡単で常識的な方がかえって良いのです。

「経済」の語源。これは先日学生相手に調べましたが、中学で経世済民と教えているようです。経世済民の意味をどこまで教えるかは掴めませんでした。今のマルチョイ式で線を引くということなら、経済—経世済民—政治、となる。

続いて外国語。当然横文字で、ともかく英語で言えとなると、economy ですから、これは中学生が知っているし、片仮名のエコノミーなら学齢前の子供でも知っている。それでは economy の

語源は、となると、これはさすがに中学では教えてないでしょう。ここは大学の教養課程の出番で、私もそこで学びましたが、ギリシャ語のオイコノモス。立ち入ると、家の意味のオイコスと規範か管理の意味のノモスの合成語だ、となる。教養の経済学としては真っ先に教えるべきことで、これを教えないのは、教養などは無用で初めから実用のギトギトした金儲け経済学を教えれば良いと思っ込んでいる先生か、本人に教養のない先生。もっとも、他人様の無教養は嗤えないので、私自身西洋古典学は全くやったことがなく、ギリシャ文字もまともには読めない。無理して書くと、οικοςとνομοςでοικονομιαですか。それで改めて括ると、経済の意味はモノカネ・損得・遣り繰りの世界、語源は経世済民で、英語はエコノミー、その語源はオイコノモス。ここまではこの席におられる方々は常識として御存じなわけですね。そこで、こんな簡単な話がウネるとはどういうことよ、という方の話になる。

3. こちらも手っ取り早くサンプルで示します。「経済」の語源は経世済民で「政治」だとして、では政治はモノカネ損得やりくりですか？明らかに違いますよね。政治は人と人との直接的な関係。権力が介入したり同格の者の中で利害を調節したりしますが、基本的には人間同士の直接的関係でしょう。ところが我々の「経済」は人と人との間に商品か貨幣、つまり物化された疎外態が必ず入る。どちらも人間社会の現象ですから、政治と経済で相互に影響しあうことはいくらでもあるし、重なる部分もある。しかし基本的には別の現象ですよ。人間関係の構造が違う。語源と現在の意味ではここまで違うとなったら、この間の語義の屈折を追っておく必要が出てくる。もう一つ。「経済」は漢字ですから、日本で出来た言葉ではない、という言語学的移転もある。いうまでもなくお隣り、中国とってしまうと解かりやすいですが、およそ中国と名乗る国が出来より遙か以前に、シナ文明が生んだ漢籍古典、これが文字として日本に輸入された。そこも見ておく必要がある。同じことがオイコノモスと economy や political economy の間に関しても言える。こちらをさしあたり、今のモノカネ損得やりくり経済と解しておきますと、これと家政とは明らかに違います。家政にはモノの消費やヒトの割り付けといった「経済」に関わる要素がありますが、基本的には一家の統治でしょう。その点で経世済民→経済と同様な語義の屈折を考えなくてはならないし、ギリシャ語由来となると、ギリシャ語→ラテン語→フランス語→英語という言語学的移転も考えておかなければならない。しかもこちらには、エコノミーとポリティカルと、もともと別義の二語ががくつつくという論点も加わる。サンプル的に考察しただけで、話の筋が相当ウネることが示せます。

4. 今の屈折サンプルの出発点にもうすこしだけ深入りしておきます。まず、経世済民の意味ですが、通常の解説だと、経は経緯の経で縦糸、経世は世の秩序を整えること、済民はそれによって民の暮らしを安楽にすることですね。これは政治といっても上から下へ善政を施す、権力者のお心得の語感がある。同格なもの同士の利害調節ではなくむしろ統治です。一方、オイコノモスの方は、アリストテレスの『政治学』によると⁽³⁾、オイコノミケ—家政術とポリティケ—国政術は違う。オイコスは女や奴隷を含み、その統治は家長の独裁になる。—これはこうすべきだというよりも当然にこうなる、という捉え方です—ただし独裁は力によるのではなく知識による。ところがポリスの場合は構成員が自由で平等な市民だから、王といえども独裁は出来ない。さて、これらを比較しますと、オイコスは狭くて独裁、ポリスは広くて平等で、経世済民の世はポリスと同じかそれ以上の広がりを持ちそうだが、暗黙に上下関係を含む。

これと、モノカネ損得やりくりの「経済」を比べると、こちらの人間関係は形式的に平等ですね。商品の売手と買い手の関係だから、嫌なら買わない安すぎたら売らない。形式平等。もちろん市況によって有利不利が生じ、実質的不平等はいくらでも起こりますが、その際でも形式的には平等でしょう。ただ雇用関係だけはちと面倒で、これは宇野さんのいう労働力商品化ですが、労働力という無形の能力をそのまま売買することは出来ないのです、製品当り加工賃か労働力用益権の時間決め売買かの形を擬制する。その売買、つまり工場の入り口までは売手と買い手は平等で、労働者は売らなければ食えないが、資本家は買わなければ生産出来ず利潤が得られない。ところが工場に入ってしまうと、労働者は資本家の意思に従属してその指示通りに労働するしかない。ここは上下関係にならざるを得ないのです。「経済」は拵げればこの意味の上下関係を含みますが、基本的な売買関係としては平等で、その限りではオイコスとも経世済民とも違い、ポリスと同様である。こうして、人間関係が直接かモノが介在するか、上下関係があるかないか、この二つの座標軸で整理できるわけですが、いずれにせよ、語源と今の「経済」では語義の上だけでも単純でない屈折があったことが改めて判ります。

5. 以上を前提に、漢字の経済と横文字の economy と、二つの系列に一応区分して、語義の屈折を立ち入って考えます。予め論点を示しておく、縦文字の経済ではまず経世済民の語源探しがある。これが結局一番面倒でした。ついでこの経世済民が日本で使われ、江戸時代後期18世紀初頭以降モノカネ経済の意味に移って行く。それでもまだ古い皮袋に新しい酒を盛るで、権力経済の意味で経世済民の含意を残していたのが、幕末慶応年間の英書の翻訳で吹っ切れて、明治以降は民間のモノカネ損得やりくりになった。こうして今日の「経済」が出来上がるわけですが、その先まで入っておきますと、この日本化した漢字が清末に本家に逆輸入され、間もなく先方で辛亥革命が起こって中華民国が成立し、以後中国語として使われるようになった。これで大筋は一巡するわけですね。ここへ「経済」に外から衝撃を与えた economy の成立が加わるわけですが、ここではまずオイコスから economy への言語学的転移、経済学史的な、*économie politique* のフランスにおける成立とイギリスへの転移、イギリスにおける economy, political economy のモノカネ化、最後に political economy と economics の異同、となる。

6. 経世済民の語源探し。ちと手間のかかる話ですが、日本語ですからまず『広辞苑』を引きました。この辞書の「経済」に三つ説明があることを御記憶でしょうか。①が漢字の「経済」の説明で、いきなり「文中子礼楽」と出典があり、つぎに語義で「国を治め民を救うこと。経国済民。政治」とある。経世済民は統治であって「政治」ではまずいと先程いいましたが、ここの問題はそれではない。「経済」に出典があるのに「経世済民」にもこれと同義とされている「経国済民」にも出典がないのです。つぎに、「経済」の②は頭に英語の economy があって、以下「人間の共同生活の基礎をなす財・サービスの生産・分配・消費の行為・過程、並びにそれを通じて形成される人と人との関係の総体。転じて、金銭のやりくり。→理財。」これで皆さん解かりますか？細かく解剖すれば economy には共同体の意味があるからそれを活かしたのだから、生産分配・消費云々は後に出すマカロックの定義の引き写しだとか、「並びに」以下は唯物史観の転用だとか判りますが、内部矛盾もあるし全体として何を言っているか解からないでしょう。だから冒頭の語義論で辞書に頼らないことにしたのです。③は「費用・手間のかからないこと。儉約。」これはこれでも良

いですが、②の終わりに「やりくり。→理財」とあるので、それと分立させる必要はない。つまり、語源論を含めて『広辞苑』は混乱がひどくてほとんど役に立たないのです。一見簡単だが話がウネると言うのも、こうした意味です。

そこで経世済民の語源として諸橋轍次の『大漢和辞典』に頼ることにしました。自慢になりませんが漢学はまるでダメでそもそも白文が読めない。こういう人間が漢学をいじるとしたら真っ先に頼るのがこの辞典です。ここで割註的に大東ナショナリズムを発揮しておきますと、名辞典と評価の高いこの辞典、実は本学の前身の大東文化学院の産物です。諸橋は東京高師の教授と言われ、この辞典は教育大学の産物と思われていますが、実は彼はかなりの期間漢文学学校大東文化学院の教授を勤め、デキる学生を育てていた。その何人かを使ってあの辞典を作ったので、このことは『大東文化大学五十年史』、特にその中の故原田種茂の文章ですぐ判る⁽⁴⁾。こういうところだけはちゃんと見てあるんです(笑)。今大東にいる人たちもここは掴んでおいた方が良いでしょう。さて経世済民。この大辞典で「経済」を見ますと、まず「国を治め民を救う、世を治め俗を救う、経世済民」とあって、以下出典ごとに『抱朴子 地真』から経世済俗、『文中子 礼楽』から経済、白居易の代書詩から万言経済略、王安石伝から経済道徳と引いてある。それでいて「経世済民」には出典がついていないのです。「経済」が『文中子』にあり、白楽天の文にもあるとなれば唐代にはあった語か？となりますが、まだそれ以上は判らない。そして経世済民は依然出所不明で、その代わり経世済俗の出所が『抱朴子』だとまでは判った。もうすこし自力で進められないかと思ってこの両書を見ることにしました。といっても漢文は苦手ですから、図書館で解説付の原文を貸せといったがそれはなくて、日本語の解説本を借り出した。えらいもので、両書ともに複数の解説本を持っていました。ところが『文中子』に「経済」がなく、『抱朴子』に「経世済俗」が全く出てこない。後にこれらの語が各書の中心思想でないから、多分解説から省いてしまったせいだろうと推測しましたが、当面は結局原文を借りて見るしかなくなった。そして『抱朴子』の地真篇では「経世済俗」はすぐ見つかりましたが、そこは諸橋の辞典に引用してあった通りで、「経世済民」の方は出てきそうになかった。もっと困ったのが『文中子』で、この礼楽篇、三遍読んでも「経済」が出て来ない。それで図書館へ舞い戻って、「辞典で有ることになっている「経済」の文字がないよ、版が違うと或る文字がなくなるってことが起こるのか？」などと司書連に問いかけた。むこうも困ってしまって、森田さんがかなり丹念に見てくれたのにやはり出て来ない。隣の倉田さんが「目が代わると見えるといいますから」と読み直してくれ、もういいよと言いたくなった頃に「ありました」となった。彼女漢文に強いらしいのです。それで改めて見たら、かなり長い行組みで、或る行の最下段に経、次の行の最上段に済とあった(笑)。これは見えなくとも不思議ではない。健常者だって手間がかかるのですが、私は視野狭窄で左側失認ですから、自分だけで拾うとなったら一字づつマークを着けて読むしかなかった。おかげでそれはせずに済みました。大東文化大学図書館万歳、です。

7. しかしまだ経世済民の出典は判らない。こうなったら奥の手で、大東には中国文学科があるのだからその誰かに尋ねれば判るだろうと考えた。といっても中文の先生を誰一人知らない。ただ、大橋由治さんは、それまで顔を見たことも声を聴いたこともありませんが、佐藤史子さんを介してお互いの存在だけは知っていた。そこで大橋さんにいきなり電話を掛けて、「御専門は古い方ですか新しい方ですか」と尋ねた。古い方だとおっしゃるから、「丁度いい、経世済民の出典を教

えてくれ」と、むしろもう少し丁寧に、こちらの探索過程の困難を含めてお話ししました。結構時間を掛けてくださったと見え、十日以上たって年末に資料つきでお返事があった。これを見てさすがはプロだと感服しました。

要点は三つあって、①国・民・世・俗は互換性があり、経・済と組み合わせた経国、経世、済民の類は「経済」より以前から見られた。— 互換性があるとなれば経世済民も経世済俗も同義だとなり、そればかりか、経国済民も、後に出てくる福沢の経国済世も同義になりますよね。②経と済は同義で、同義文字を重ねて熟語にするのは晋代（四世紀）から行なわれるようになった。— これにはアツと言いました。これまで済民で救うの意味しか考えていなかった。サイの音を通じて考えればこの文字もトトノエルに通じそうですね。晋となれば「経世済俗」の『抱朴子』が書かれた頃になる。因に「済俗」の組み合わせはこの本だけらしい。となると常識的に、経世済民がまずあって、その縮小語として経済が出来たなどと考えるのは誤りで、むしろ経済があって後に経世済民が出来たとする方が考え易い。③これが極め付きですが、「経世済民」の初出は北宗時代の孫甫の『唐史論断』巻中の「睿宗」と華鎮『雲溪居士集』中の「楽論下」であると資料⁽⁵⁾付でご教示があった。この言葉は宗学と関連した言葉であろうとの示唆もついていました。これで欣喜雀躍ですよ

ね。

そこから先はシロウトの気楽さで、これが朱子学の常用語になっていけばウマイと考えました。朱子学は士大夫層の学だと言うから、道徳的な匂いのする、上から下への「経世済民」はぴったりだし、おまけに徳川時代の官許思想ですから、江戸時代後期に「経済」が「経世済民」の意味で多用されることの説明にもなる。それで済ませて良ければ、私が全く知らない江戸期以前の漢学導入史は飛ばしても良いことになる。そこで手元の辞典類、近藤春雄『中国学芸大辞典』、諸橋轍次『中国古典名言集』、溝口・丸山・池田『中国思想文化辞典』に当たって見ますと、宗学→朱子学と捉えてもよさそうでした。それで今のシロウト仮説のままで進めますが、いささか危険が残る。

①大橋先生自身が「北宗の二例が南宗の朱子とどのような関係にあるか宗学に疎いので詳しくはわからない」と極めて慎重である。②私自身朱子など読んだことはありませんから、そこで「経世済民」を実際に使っていたかどうか判らない。使っていれば『大漢和辞典』初め上の三つの辞典に用例が出ていそうなものだが一つも見かけない。というわけで、ここの繋がり学問的には自信がありません。しかしシロウトの頑張りやで、間違っていたらすぐ謝って撤回するつもりで、話の方はうずうしく前へ進めます。

8. 江戸時代後期、18世紀初頭以降「経済」の文字が多用されるようになりました。その大筋は図書館の本館四階にある、岩波の『日本思想大系』で掴めます。先に結論を言っておくと、それは経世済民から始まり、その含意で使われながら、しだいにモノカネ経済の比重を高めて行く。それでも最後まで権力者の経済、財政や経済政策の意味が吹っ切れない。むしろ使っているうちに民間経済の比重がますます高まるのですが、最後まで第一義的に民間経済とはならなかった。そこを吹っ切ったのが、ギリギリ幕末の慶応年間に現れた英書の経済学の邦訳で、神田孝平の『経済小学』と福沢諭吉の『西洋事情』外篇でした。

今の粗筋は、太宰春台『経済要録』と佐藤信淵『経済要略』を線で結ぶとほぼ掴めます。18世紀初頭に出た太宰の本は、全く経世済民論です。そもそも書き出しが「凡天下国家ヲ治ルヲ経済ト云。

世ヲ經シテ民ヲ救フト云義ナリ」で、以下各篇名が、総論、礼楽、官職、天文地理律曆、食貨、祭祀学校…で、全く経世済民論の構成です。このなかで唯一モノカネ経済に関わるのは、全十篇中第五の「食貨」で、ここには財政収入不足、商人からの借入に触れています。だからモノカネ経済が全くないわけではありませんが、せいぜい経世済民の一環としての権力経済にふれただけ。『広辞苑』に、太宰春台は「経書・経済に通じ」とありますが、ここの「経済」は理念的な経世済民以外のものではない。これに対して一世紀後の佐藤信淵では、本質的に昨日今日の「経済」になっている。構成を見ると、全十五巻で、総論、創業、以下開物つまり産業と生産物ですね、これが十一巻あって、終わりの二巻が「富国」となっている。無論、執筆のモチーフが良い社会の追求ですから、経世済民の枠が掛かっているし、民間経済と権力経済との比重も民間中心とまでは言い切れない。しかし太宰春台が理念の世界にいたとすれば、佐藤信淵は現実の世界に入っている。日本における「経済」の語義は、18世紀初頭から19世紀初頭にかけて、決定的に今日の意味の方向へ変わりつつあったのです。後に見るヨーロッパでの語義変化と比べてもさほど遅くはなかった。

このシェーマ、結構行けると思いますが、このままではいささか資料不足です。『日本思想大系』で見られるのは、この他には、海保青陵『経済談』、山方蟠桃『夢の代』くらいでした。海保はやはり漢学者ですから、山方を高く評価していたと言いますが、自説では経済といっても藩財政や経済政策が主で、山方より遅れている。山方はさすがに商人学者バントウというだけあって、『夢の代』中の「経済」は米の需給と価格変動を論じていますから、これは全く市場経済・民間経済で、歴史を先取りしていると言える。この程度には図書館本館で見られましたが、いくらなんでもこれでは資料数が少なすぎて危険だし、実は太宰春台の肝心な「食貨」は『日本思想大系』では省略されている。何とか埋めたいと思って、昔いた東大社会科学研究所で同僚だった平石直昭さんに電話を掛けた。日本政治思想史の専門家で、こういうときにはまことに役に立つ人です。この件では、滝本誠一編集の『日本経済大典』を教えてくださいました。いろいろ話す中で、「経世済民」は太宰春台の造語かと尋ねたら、そうではないでしょうという答えがあり、経済の語義変化がeconomyの語義変化にさほど遅れていないという私の把握には大変興味を示してくれました。が、一番知りたい『日本思想大系』にどういう必要文献が欠けているかという点は教えてくれないんだ、プロのくせに（笑い）。ただ、すべて『日本経済大典』を見なさい。こっちは滝本誠一の名前を経済史家が引用していたことが僅かに頭にある程度ですから、その晩は、さてこれでまた東大で図書館漁りをせざるを得まいかと覚悟した。それでも大東の図書館を信用していますから、翌日来て探してもらったら、簡単に出てきました。但し置場は書庫棟で、現物を見なければどれを借りたら良いのかも判らないと言って、係一関君だったかな一も顔見知りですから、書架を開けてもらい、ついでに小型の椅子とデスクも出してもらって、一冊ずつ捲りました。何を探したかという、書名や篇名に「経済」とある文献、見出しが「経済」になっている文献を片端からリストアップした。そしてその中身をちらりと見て、その上で滝本の「解題」で著者名出版年の類を調べる。何しろ『日本経済大典』は全計49巻、今の拾い方で引っ掛かった文献は15点ありました。これだけの作業で一時間半は掛かったかな、どういうわけか暖房が効かなくなってひどく冷え、後で本館四階の、暖房効きすぎのフロアで追加探索をやってようやく戻りました（笑）。『日本経済大典』で拾った15点のうち、半分くらいはこの際の資料にはならない。刊行年が判らなかつたり、ピラのようなもの

で無内容だったり。青木昆陽『経済纂要』という大きな本も見つかりましたが、漢籍古典の経済関連の文字の抜粋で、用語史上の位置づけが出来なくて困りました。著者が蘭学者の青木昆陽なのか否かも滝本の解題では判らない。というわけで滝本編から4・5点追加して見たことになりましたが何か新しいことが判ったわけでもない。しかし、諸「経済」書の出版年次のムラが除去できて、もともとのシェーマの安定性が増したとは言えると思います。

9. 幕末には「経済」が脱「経世済民」化する傾向がはっきり見えていて、その傾向をもうひとつ飛躍させたのが英書の翻訳でした。神田孝平『経済小学』が慶応3年、1867年で明治維新の前年の出版です。福沢諭吉『西洋事情』は、初編が慶応2年、1866年ですが、外編は慶応4年、1868年で明治元年です。今日では両方とも訳書と原書の照合は可能です。まず神田『経済小学』。これは『明治文化全集』に入っていますが、どうやら忠実な訳らしい。もっとも、神田は英語はできませんから、エリスの原書を直接訳したのではなく、蘭訳からの重訳です。底本になった蘭訳書はグラーフランドの『国民経済学の基礎』⁽⁶⁾という本らしいですが、これは見たことがない。英文対照で目次を拾っておきますと、上編が文明夷俗、国民性行（原文は自治）、蓄積（原文は富）及び財本、地代、雇直（賃銀のこと）、利分（利潤）、分業…で14章、下編の初めはこれと重なって蓄積財本、地代、雇直、利分、同業相結相迫（協同と競争）、勤業（産業組織）、貧窮…で19章です。つまり構成はすでに資本主義経済の体系的な概説書になっていて、主たる対象は民間市場経済です。下編の終わりの部分には、自在交易制限交易、器械、拓土移民（植民）、直税間税等があり、ここは権力経済ですが、全体の構成はリカードの『経済学および課税の原理』を連想させます。原本は W. Ellis, “outline of social economy”（初版1846年—神田訳の原本は1850年版）で、このころのイギリスには、この種の通俗的経済学の解説書啓蒙書教養書の類ががつぎつぎと出ていたものと思われます。我々が教わる経済学史だと、19世紀半ばは古典派経済学の崩壊期で、理論的には進歩がなくなっている、つまらない時代ですが、社会史的には古典派的通俗理論の普及期で、エリート階級から労働者上層までをブルジョア経済学思想で陶冶して行く期間だったと思われます。これについて調べたことはありませんが、通俗的経済学書は極めて多数出版されていたに違いない（その走りが、初の女流ベスト・セラー作家のハリエット・マーチノーでしょう）。その一つが蘭訳されて、日本の蘭学者の目に留まったのでしょう。

もうひとつが福沢の翻訳。『西洋事情』の刊行はいささか複雑で、慶応元年ころから写本で流布し始め、一部異文が残っています。前にやった「会社」語源論ではこれが重要な意味を持っていました⁽⁷⁾。初編の刊行は慶応二年で、この中にも「経済」の文字が一度だけ、むしろ経世済民の意味で使われています。しかしここでの問題は1868年刊の外編です。一昨年、慶応の出版会から、西川俊作さんの編集で、使い良い『西洋事情』が出ました⁽⁸⁾。この外編に「題言」があり、出版事情が判ります。英人チャンブル氏選の経済書を訳し、傍ら諸書を抄訳し増補し三冊となし、西洋事情外編とするというのです。そして、チャンブル氏の経済書は、人間交際の道にはじまり国の分立する理由、外交、政府の理由や形態等を説く「ソサイヤルエコノミー」と、経国済世を論じた「ポリチカルエコノミー」とに分かれる。ところが神田訳『経済小学』を入手して見たら、この後段と大同小異なので、自分は初めの一段を訳すに止め、経済論の詳細については神田訳に譲る。これは労を省くためではなく、西洋文化の吸収に忙しいこの時期に翻訳能力は限られているから、翻訳力を別

の方面に振り向けた方が有効だからである。これが神田訳に言う「分業の便利」というものだろう、と、もう「分業」をシャレに使っている（笑）。明治元年のことです。えらいもいのですね。当面われわれに関わりがあるのは、巻之三「経済の総論」です。交際の学と経済の学を区分した後、「ポリチカルエコノミー」を経済と訳すと述べ、「その字義を以て事実の義を尽くすに足らず」として、エコノミーはギリシャ語で家法の意味である。家内百般のことを整理することで、家事の整理の眼目は無駄な費用を省くことだから、エコノミーの文字は「唯質素儉約の義にのみ用ゆることあり」。上のポリチカルの字は国の意味だから、二つ併せてポリチカルエコノミーと云う時は、「唯国民、家を保の法と云へる義を成すのみ」。「マッコルロック氏云く、経済とは物を産し、物を製し、物を散じ、物を費やすに、その紀律を設くる所以の学文にて、即ちその物とは、或は必用なる物あり、或は便利なる物あり、或は人意を悦ばしむる物ありて、何れもこれを売買して価あるものなり」と⁹⁾。因にこの内容は、後でOEDの引用として取り上げる、マカロックの経済学の定義と同じものです。マカロックが通俗経済学の下敷きになっていたのかも知れない。

さて、福沢が「チャンブル氏所選の経済書」と呼んでいるのは、J. H. Burton の“Political Economy for use in school's and private instruction” 1852ですが、匿名の書で W. and R. Chambrs という出版社の名が表に出ているため、福沢は出版社名で指示したものと思われます。後の探索でバートンの著作だと判明したらしい¹⁰⁾。今掲げた箇所はバートンの或るページの忠実な翻訳ですが、この把握は中々のものです。今日教養課程の経済学で、「経済」の語義をここまできちんと教えるべきだと思いますが、そこまで及んでないのではないのでしょうか。無論、19世紀半ばのイギリスには経済学の啓蒙書、普及書、教材書の類が多々あって、その始めの部分には Political Economy の語義、語源が書いてある場合が多かったと想像されます。後で取り上げる、スチュアートの『経済学原理』が「緒論」として語義を論じているのに始まって、マカロックの『経済学原理』も「定義」としてこのスタイルを踏襲しています。それにしても福沢の「分業」ぶりは的確なものです。神田の翻訳によって内容的に「経済」が明白に今日の「経済」になった。福沢は語義論を加えることで、この推転を確かなものにしたわけです。そこで、これは割註ですが、福沢は social を交際、人間交際と訳しています。それと仮名読みの「ソサイヤル」を併用している。社会という訳語が世に定着するのは、明治八年に福地源一郎が新聞紙上で「社会」にソサエティと仮名を振ってからだそうですが、社会の文字は漢籍古典に古くからあり、とりわけ幕末漢学で読まれた『近思録』では相互の向上を図る有志の集団の意味で使われていたそうですから、福沢も語としては知っていたでしょう¹¹⁾。それを使わず、ソサエティを個人から出発して人間—ジンカンと読ませたいのでしょう—交際と訳した。意識としてはなかなか良いのですが、語呂が良くないので、結局福地訳の方が定着することになった。だが今重要なのは、このことよりも、福沢の語義に関する翻訳で、ポリスはオイコスより広い社会のことだから、「ポリチカル・エコノミー」と「ソサイヤル・エコノミー」が実は大差ない、と示されていることです。バートンは双方を区別した編別になっているから福沢は一応それに従っていますが、神田のエリスの social economy は福沢の political economy と同義ですよ。

10. 幕末明治初期に今日風の語義になった「経済」が、この後中国語に入ってゆくことになりま。私は中国語は全く出来ませんが、そこは漢字圏の有難味で、現在の中国でも「経済」は漢籍古

典の経済ではなく、日本語の経済の意味で使っていることは漠然と捉えていました。帝国主義とか共産主義とかの左翼運動の用語が日本語渡来だということは、向こうの人たちから聞かされたことがあり、「経済」は左翼用語ではないので同列には扱えないものの、用法がどうも日本語と同じで中国伝統の「経済」でないことは感じ取っていました。この報告を準備する中で、確認の意味で法学部の近藤邦康さんに改めて教わりました。近藤さんは前の勤め先の社会科学研究所で同僚だったし、訪中団に加えてもらったこともあって気安い仲間です。その近藤さんが、事実そうだと言い、文献として、『中国語大辞典』と、さねとう・けいしゅう『中国人日本留学史』を教えてくださいました。大筋は、日清戦争の後、清から日本に案外多くの人が留学し、近代化で先行した日本文化を持ち帰った。その中に明治期になって意味がモノカネ損得やりくりに定着した「経済」という言葉があった、というものです。両書に、中国語の「経済」が日本語由来であることがはっきり判るように書いてあります¹²⁾。

これで縦文字の経済の屈折史は一巡りしました。考えて見ると、端緒の経世済民は大橋さん、途中の日本語としての屈折は平石さん、最後の日本語の中国語化のところは近藤さん、のご教示に便乗していて、私自身は舞台回しを勤めただけの、言わばキセル研究でありました。つぎに横文字の屈折史に移ります。

11. ここは多分にOEDに依拠することになります。この辞書の *economy* の語には1ページ分くらい説明がついていて、はなはだ詳しいものですが、とりあえず語源部分を見ると、ギリシャ語からラテン語に入った時点がすでに二つある。まず、古典ギリシャ語の *οικονομος* から古典ラテン語の *oeconomus* になった。なるほど古式床しい英文だと *oecconomy* と書いている場合がありますね。僕らでさえ時には見かける。もう一つは中世ラテン語に当時のギリシャ語から入ったもので、これは *oconomus* と書く。こちらから初期フランス語、初期英語の *oconomie* ができた。この他に、明示してありませんが、OEDがしばしば教会用語に言及しているところからすると、コイナーギリシャ語→ヒエロニムス訳のウルガタ→ローマ・カトリック教会のルートがあったことを暗示しているのではないかと、勘繰りたくなるのですが、今は勘繰りだけにしておきます。

中世ラテン語を母体に、民族移動と関連してロマンス諸語が生まれる。イタリア語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語で、知ったか振りして付け加えればルーマニア語とレト・ロマン語—スイスの一州で使われているようですが—とある。このうちフランス語が宮廷語としてイギリスの地に持ち込まれ、ゲルマン語系の地元言葉と合体して英語になるわけですが、*economy* はラテン語以来の語形で英語化した。フランス語や英語では *économie*, *economy* に相当する地元言葉はすぐには思いつきませんよね。ところがドイツ語だと外来の *oekonomie* と並んで地元語の *Wirtschaft* という語が出てきます。これは後で取り上げることにして、取りあえず英語の *economy* の語義を穿鑿することにします。

皆さん英語の *economy* にいくつ意味があるか調べてことがありますか？有る人がいたら偉いものだが、多分ないんじゃないかな(笑)。英和辞典の小型のもの、コンサイスクラスで良い。引いてごらん下さい。四つはある。第一、経済。経済学もここに含めて。第二、節約。ここまでは誰でも知っている。第三、自然の理法・秩序・有機的組織。第四、神の摂理、天の配剤 (*dispensation*)。この後の二つは大抵知らないんじゃないでしょうか。実は私も最近まで知らなかつ

た。佐々木純枝という人 — 中央大学の英語の先生だそうですが — の『モラルフィロソフィーの系譜学』という本、薄い割りに高いのを何となく惹かれて買い込んでおいた。或る時読んでみたら、全体が大変面白かったのですが、中に、economy なる単語には、経済と節約の他に有機的統一の意味と神の摂理の意味がある。それは小型の英和辞典にも載っている。思想史の領域ではむしろこちらの意味の方が重要なのだ、とあった。ホントカイナと思って英和辞典を引いてみたら、ちゃんとそうなっていました。これは参った。分かり切った単語だと思って、長年引かずにいた。考えてみると後ろの方の語義など読んだことがなかったですよ。

ここからは典拠なしにものを言いますが、統一体はオイコス由来、神の摂理はノモス由来、と想像できます。すると経済だの節約だのは後から付け加わった語義ではないか？無論そう言い切れるほど学はありません。ただOEDには、まず語源に関わる部分に、神学用語として、economy は dispensation と互換的だとある。そして別途「神の摂理」の部分が詳しく書いてあって、まず神学用語とあり「神の統治」と出てくる。この、われわれが使い慣れない語義の比重が高いのがどうも苦になります。ここで想像力を働かせると、これがウルガタ→ローマンカトリックの用語ではないか？となる。ところが、そうならこの語義は英語よりフランス語の *économie* やイタリア語の *economía* の方で大きいはずですよ。しかし手元の辞書ではそうならない。『伊和中辞典』では *economía* は、経済・経済学・節約(貯蓄)の他には、秩序・自然界の理法・調和、とある。英語に比べると、神学用語の意味がかなり軽い。フランス語となると、「コンサイス仏和』では、*économie* は経済・調和・儉約と、用例として(宇宙の)組織・儉約、とあって、神の秩序の意味はほとんどなくなる。『スタンダード仏和』ではいっそうなくなっていますし、割に新しい『プログレッシブ仏和』では、経済・経済学・節約・貯金・文章構成で終わり。神様などおよそお出ましにならない。念のために、仏文出の友人長田晃さんに、私は持っていないリトレ=ボージャンを引いてもらいましたが、やはり神様はいませんでした。

となると、英語の *economy* にある「神の摂理」はカトリック由来ではなく、英国国教教会の筋かも知れない。ですがこれは『キリスト教大事典』の類を引いた程度では全く判らない。経済学者でクリスチャンの中山弘正さんに聞いてみましたが、英語のバイブルで *economy* が使われているか否か、記憶がないと言っていました。dispensation になっているのかも知れません。

12. どうせ知らないことを知ったか振りしてしゃべるのですから、もう三つ四つ取り上げます。まず、ドイツ語では、地元言葉の *Wirtschaft* が、ラテン語由来の *oekonomie* と並び立っています。意味は、家政、経済、客商売(旅館・飲食店)、農場経営で、*oekonomie* も意味は家政(経営・節約・経済)、農業、経済学ですから、客商売だけが違う。同じゲルマン系のオランダ語では、*economie* は経済、経済学、節約で終わり。私の力では地元言葉がみつかりませんので、加藤栄一さんにドイツ語経由でドゥーデンを引いてもらいましたが、オランダ語の口語に *Waardschap* という言い方があるとのことでしたが、手元の講談社『オランダ語辞典』にはその語がない。代わりに苦勞の末、*Staathuishoudkunde* という熟語で「経済学」となっているのを見つけました。問題は英語で、外来語の *economy* と並び立つゲルマン系の地元言葉がないか、ですが、オランダ語同様、容易に見つからない。強いて言えば、*husbandry* で、農業、家政、節約の意味がある。*husband* には夫の他にしまり屋の意味があって、*husband's tea* で薄くて冷たい茶の意味があるん

だそうな。

ドイツから東へ行くと、ポーランド語で、*gospodarka* 経済、管理、農場とあり、*gospoda* で飲食店・居酒屋だから、ドイツ語の *wirtschaft* と近い。無論ラテン語由来の *ekonomia* もあります。もっと東のロシア語。これにもエコノミカ *экономика* 経済、経済学と、*Хозяйство* 経済、経営・家業、経営設備、農業・農場とある。ロシア語にはなお、*хозяйственность* で経済的なこと、節儉性という語がありますが、ケチケチすることの表現は東へ行くほど薄くなっているようです。

そこで、比較言語学など全く習ったことがなくせに以上を大まかに括りますと、ラテン語由来のエコノミーの語はどの国語にもありますが、ロマンス語諸語ではおそらくその一語で間に合っている。ドイツ以东では、それと地元語の二本立てになる。地元語の方は発音は国語によって全く違いますが、語義は案外共通していて、家政・経営・農業のあたりを巡っている。それに国語ごとにすこしづつ違う語義が加わる。そして地元言葉が「経済」として活着している場合は、ラテン語由来のエコノミーの語義が抽象語として狭く限られがちになる。問題はゲルマン系でありながらフランス語の影響が強い英語とオランダ語の場合で、英語には *husbandry* なる地元語が節約の意味に活着している。オランダ語については、私の力ではこれ以上は判りません。

13. 言語学的探索はさしあたりここまでで、以下 *political economy* の探索に入ります。ここは経済学史の領域ですが、相変わらず知ったか振りをします。私は経済学史家ではないので、こういう際は付け焼き刃を振り回すしかないのです。さてここでの大ネタは、高橋誠一郎『経済学前史』の「緒論」とOEDです。OEDの *economy* の説明中に *political economy* の説明が入っており、ここにこの語はフランス語の *économie politique* の英訳だと、明快に書いてあります。それで *économie politique* の方を探し始めたら、モンクレチアンとJ. J. ルソーの用例はすぐ出てきましたが、中間の用例が判らない。この間にフランス重商主義とフィジオクラートが入りますから、後者の用例の有無を吉原泰助さんに尋ねてみたら、答えの代わりに高橋の本の「緒論」を教えてくださいました。この本自体は知っていましたが、この際使うことは思いつきませんでしたので、改めて読んで見たら大変役に立ちました。重要なところを掻い摘んで拾いますと

… 古代ギリシャで、クセノフォンの本では『経済学』は農場管理と家計指揮のことである。偽アリストテレス派の『経済学』に「ポリスのオイコス」とあるのは都市国家の財政収入方法のことである。アリストテレスの『政治学』は家政術 *オイコノミケー* と取材術 *クテーチケー* とを区別している。古い家政術は欲望満足を目的とする富の消費に関わり、新しい取材術は金儲けおよび交易を包含する富の取得を扱う。1615年、フランスのモンクレチアンが『経済学概論』 *Le traicté de L'Économie Politique* を現わし、政治経済なる古語を復活させたのみならず書名とした。国家の収入が人民の貧富に依存するところ大と判ってきたせいである。イギリスのペティは1662年の『租税貢納論』で「政治経済学」 *Politicks and Economicks* と呼び、1691年に出た『アイアランドの政治的解剖』の中で *Political Economics* と呼んでいる¹³⁾。18世紀に至ってもフランスの経済学はまだ政治学中に包含されており、フィジオクラート、自らエコノミストと称した最初の経済学派でさえ、研究対象は富ではなく政治であった。彼らは人民の貧困が国王の貧困を齎すと考えて自然の法則に従うべきことを説いた。J. J. ルソーはかの『大百科全書』に政治経済 *Économie*

Politique の項を執筆しているが、これは全く政府の本質・目的・職能を論じたものである。…

偶然になりすが、OEDはこのすぐ後の時期を扱ったこととなります。Political Economy はフランス語から入った。初期の用例はスチュアートの書名、スミスの一用例、マカロックの定義の三つである、というのがその大筋ですが、そこへ入る前に、フランスにおける *économie politique* の用例をもう少しだけ見ておきます。その走りがモンクレチアン Antoine de Montchrétien (1575～1621)です。詩人・劇作家だったのが、イギリスを体験して、王に捧げる経済学の本を書きましたが、最後は宗教戦争に巻き込まれ殺された。この人の『経済学概論』は「経済学」を書名にした最初の本だそうですが、この名は日本ではあまり有名ではない。私も教えられたことがありませんでした。中身はあまり理論的に高いものではないが、ともかく「エコノミー・ポリティーク」を掲げた本だ、というのがヨーロッパでの普通の評価らしく、私の知る限りで、カール・メンガーが、1883年の『経済学の方法に関する研究』⁽⁴⁾の中で、19世紀半ばのガルニエによる発掘を引用しながら紹介しているのが、著名な本の最初です。日本人では、新渡戸稲造が1890年にドイツで書いた博士論文『日本土地制度論』⁽⁵⁾で名を出したのがおそらく最初でしょう。フंक＝プレントナーによる長い解説付の覆刻⁽⁶⁾が出た翌年のことです。新渡戸には印象があったのでしようが、新渡戸論文は日本の経済学にあまり影響を及ぼさなかったようです。ジイドとリストの『経済学史』⁽⁷⁾は、私の知る限りではフランス人による経済学史の唯一のもので、その書き出しはモンクレチアンです。これも全く用語論で、「*Économie Politique* といふ言葉は、第十七世紀の初頭、アントワヌ・ド・モンクレチエンが命名したのであるが、その後一世紀半を経過したる第十八世紀の中葉に至るまで、此の言葉に依って示されたるものは、今日の意義と殆ど一致してゐなかつた」と言い、その証拠として『大百科全書』にルソーが書いた「政治経済論」を挙げている。この文は『ルソー全集』に翻訳が入っていますので、以前に読んだことがあります。高橋の紹介通り政府論・統治論で、社会哲学とは言えても経済学の部分は全くない。同時代のフィジオクラートの影響がないかと考えてみましたが、『大百科全書』は1855年の出版で、ケネーの『経済表』はまだ公表されていないし、そもそもルソーはフィジオクラートが嫌い理解できなかったと言いますから、影響がある訳がない。そしてどうやら、エコノミストと自称したフィジオクラート達も、「エコノミー・ポリティーク」をそもそも殆ど使っていなかったようだし、いわんやモノカネ損得やりくり経済の意味では使おうとしなかつたらしく、そうなるこの面でのフランス人の貢献は、古代語を近代語に復活させただけ、それも当のモンクレチアンから140年後のルソーまで、さほどの使用例もなく⁽⁸⁾、ルソーの論題名が、フランス文化指向が強かった同時代のイギリス人作家達に強い影響を与えただけ、ということになるかも知れません。

この点はまだ実証上の自信はありません。モンクレチアンの名については、日本の学界でも戦前のうちに高橋誠一郎や舞出長五郎が挙げていますが、本格的な研究は今もあまりないようです⁽⁹⁾。シュムペーターが遺稿となった『経済分析の歴史』で、モンクレチアンは、エコノミー・ポリティークと言ったばかりに、理論的には話にならないほど低水準なのに、不当にも有名になった⁽¹⁰⁾、とひどく辛い評価をしています。本当にそうか。私も物好きで、気づいたのをきっかけに覆刻版のリプリントを買い込みましたが、内容は製造業・商業・航海となっていて、ジイド・リストが言うよりは今日の「経済」に入り込んでいることは確かだし、部分的にはスミスを先取りしているところ

もあるので、シュムペーターは辛すぎるのではないかと思います。なにしろ、17世紀初頭のフランス語で400ページ、昔習って忘れたフランス語とは変化形が違うため辞書を引いてもなかなか読めない。これをすぐには精読できませんから、判断は保留しておきます。

14. さて、ここからが 英語の Political economy の話になります。OEDによるとこれはJ. スチュアートの書名から始まる。“An inquiry into the Principles of Political Economy, being an essay on the Science of domestic policy in Free Nations” 1767です。これに、内容に当る、人口、農業、商業、工業、貨幣、鑄貨、利子、流通、銀行、為替、公信用、租税の考察、という副題がついている。この「ポリティカル・エコノミー」は完全に今日の「経済」ですよね。ただ冒頭に「緒論」がついていて、概略以下のように述べています。…エコノミーとは、一家の欲望を慎重質素に賄う術である。その目的は家族のために栄養を補給し各自に仕事を与えることであって、家長がこれを指図しなければならない。一家にとってのエコノミーが一国にとってのポリティカル・エコノミーであるが、国家においては召使のようなものはなく、すべてが子供であるから、為政者は思うままのエコノミー運営はできない…。この「緒論」はアリストテレス以来の語義を自分なりに言い換えたものですが、それと本論の展開とは大きくズレていて、本論の方はアリストテレスならクテーチケー取財術と呼んだ方でしょう。つまり既にスチュアートにおいて、Political economy の語義転換が行なわれていたのです。ここにペティの影響があったかどうかは、私には解かりません。彼は理論的にはとんでもない天才ですが、後のイギリス人作家達はろくに評価していなかったように見えますので、用語上の影響が残らなかったのかも知れません。つぎがスミス『国富論』です。第四編の序論で、Political Economy の目的は人民に豊富な収入を供給し、国家に十分な収入を供給することだ、と言っています。ここは有名な箇所ですが、実はスミスは、ポリティカル・エコノミーと言う語はここでしか使っていない。いささか奇妙です。フランスへ旅行して自らの経済学を形成し、ルソーの影響も受けたというのに、そして9年前にスチュアートが『ポリティカル・エコノミー』という本を出しているのに、肝心の語彙を使ってない。偉い人にケチをつけるのは大好きだから意地悪を言いますが、古典派経済学の大枠はスチュアートの『原理』で出来ている。副題で内容が判りますよね。経済学の創始者だなどと言われますが『国富論』はその枠をなぞったものでしょう。模倣したからあえて無視した。あれだけの量の『国富論』の中で『原理』の引用はたった一箇所、それもまるでどうでも良い点です。読んでいるアリバイを挙げただけ。水田さんが新訳の中で注解したところでは、スミスはある人に宛てた手紙の中で、私はスチュアートのこれこれの部分が間違っているということを名前を挙げずに批判しておいたと書いている。そうとうイジけていてエゲツないよねこうなると。スミスという人は、普通考えられているような上品な人ではなさそうだな(笑)。敵対意識があるから、あえてポリティカル・エコノミーと言わなかった。これでは古典派の創始者にはなれませんよね。創始者はポリティカル・エコノミーを使って議論の大枠を示したスチュアートの方ではないかな。だが彼はスミスが無視してくれたおかげで、創始者になれなかった。

OEDの最後がマカロックです。彼の Principles of Political Economy, 1825の初版の冒頭にある定義が、そのまま引用されいますが、ここは覚え易いのでソラでも言える。「ポリティカル・エコノミーは、交換価値を持ち、人類にとって必要か有用か快適な諸物品または諸生産物の生産、分

配、消費を規制する諸法則の科学である。」です。経済学は法則の科学であるだから、宇野弘蔵が喜びそうな定義ですが、皮肉なことに、それを言ったのが、『資本論』で一番ひどくやっつけられているマカロックなんですね。もっとも、マルクスの方にもやり過ぎると私は思っていますが、宇野先生が改めてこの定義を知ったらどう思うか？これも意地悪のうちです。それはともかく、マカロックまでくると話が極めてはっきりしました。福沢が訳したバートンの経済の語義論はこれ。神田訳の原本もこの経済思想に乗っかっている。19世紀初頭に通俗経済学として、「経済」はまったく民間経済でモノ・カネ損得やりくりの世界のことになってしまっていたのですね。

この話にオチをつける意味で、セイを持ち出します。既にスチュアートが、Political Economyを、フランス流の統治論からモノカネ損得やりくりの経済へ語義転換していた、と素直に認めれば、問題は解消します。ところが世の中には何事もスミスから始まると言いたがる癖があり、そのスミスがポリティカル・エコノミーを定義してくれていませんから、スミスと定義したマカロックとの間の半世紀に語義はどうなったの？と言う疑問が改めて起こります。それにちょうど良い文献が、J. B. セーの *Traité d'économie politique*, 1803で、いい具合にこの初版本のドイツで出た覆刻版を大東文化大学図書館が持っていました。以前、資本家・企業者の語義穿鑿をやった時に、この本は意外なほど役に立ちました²¹⁾ので、今度はどうかと捲って見た。今度はひどかったですね。彼が言うには、もともと *économie politique* には二つ意味があった。つまり *gouvernement* 統治に関わる意味と、*richess* 富に関わることとである。昔の人は双方を混同していた。はっきり分けたのはスミスである。—これはどう考えてもスミスを褒め過ぎでしょう。『国富論』を仏訳すれば確かに *richess* となりますが、スミスは *Political Economy* を一回使っただけで定義なんかしていませんから、スミスが分けたなんぞは大ウソです。そしてよせば良いのにセーは、スミス以前のスチュアートもルソーも富と統治を混同していたなどわざわざ言っている。混同なぞしていませんよね。ルソーは専ら統治の意味に使い、スチュアートは専ら富の意味に使っていました。セーはスミスの権威でエラくなったものだから、スミス神格化の度が過ぎる。せつかく私が良いところを見つけてやったのに、こんなことではマルクスに馬鹿といわれても仕方がない(笑)。『資本論』の中で、セーはマカロックについて悪口を言われていて、マルクスはセーのことをバカと三回は言っている。こういうことを調べるのが面白いんだ(笑)。

15. 論点がもう一つだけ残っています。一度活字にしたものですが²²⁾今日の主題では落とせない。Political Economy と Economics の広狭の問題です。「エコノミックス」が現れるのはマーシャルの『経済学原理』です。その時彼は多分ペティの *economicks* は意識していなかったでしょう。マーシャルは明らかにエコノミックスをポリティカル・エコノミーより広い概念を現わす語として唱えました。少し離れた二箇所書いていることを一括しますと、ポリティカル・エコノミーは人間をエコノミック・マンとして捉えている。だが(真の、が入るんでしょうね)「経済学者」は、人間をゴリゴリの私利私欲だけで生きるものとしてではなく、血もあり肉もある人間として捉える。この捉え方をエコノミックスと呼ぶのだ²³⁾、と言うことになる。economic man という言葉は19世紀半ばにはすでにあつた語彙で、後に誰かがホモエコノミックスとラテン語化したのだらうと思います。

マーシャルの造語は、今日の通俗的な用法とは明らかに広狭逆です。ここはどう考えても今日の

用法が理論史を無視して転倒していることになる。実は無学で、この転倒は何時誰がいかなる理由で行なったものか知りません。ただ、1976～7年にアメリカにいたころ、ヴェトナム反戦気運や黒人平等化運動などでアメリカ社会が珍しく左傾していた名残りで、経済学も狭い economics だけでなく広い Political Economy を教えるべきだという学生の要求があり、そこでミクロやマクロのエコノミックスだけでなく、傍流の制度学派や異端のマルクス経済学も Political Economy として講義の内に含めることにしたのだという話は聞きました。転倒はこの時に起こったのかも知りません。事実、私が留学していた頃はマル経流行りで、スタンフォードでは、ジョン・ガーレー、ドナルド・ハリス、ダンカン・フォーリーのジョイントセミナーがあり、私も河合正弘さんに誘われて時々顔を出していました。そこでジョン・ローマーという真面目で気の弱そうな学生に、マル経の信用論で何か良い本はないか、と聞かれた記憶がある。その後全く付き合いはありませんが、彼今結構有名な人だそうですね。私のいたパークレーにはそれほどの規模のものはありませんでしたが、何とかいう若手のマル経の有名人一だそうでした一が講演に来たことはあります。『資本論』中の資本循環論を使って、その応用だったのでしょうか、商品資本の循環が市場論、生産資本の循環が成長論といった議論でした。そこで、貨幣資本はどこへ行ったのだ、おまえの流儀でやれば金融論になるはずだが、今のアメリカ経済の重要な現象が金融市場の変化だろうに、なぜそれを抜いたのだ、と質問した。その際、おれはお聞きのとおり英語は下手だから、俺に判るようにゆっくり答えてくれ、と付け加えました。そしたら相手は興奮したのか戦術だったのか、猛烈な早口でしゃべったので、何一つ判らなかった(笑)。このどちらも、Political Economy と名乗ってっていたかどうかは確認しませんでした。おそらくあれがそうだったのでしょうか。

そうだとすると、近頃の日本ではこれが二回りくらいイジマシイ姿になっている。政治経済学と名乗ってマルクス経済学を匂わせながら、婉曲語法で価値中立的なポーズをしている。土地制度史学会が政治経済学・経済史学会に改名したのだそう。私は会員ではありませんから、おまえら名前をもとに戻したら入ってやるよと言いました(笑)。私が入っている方の経済理論学会でも、今年の大会共通論題が「政治経済学の可能性」でした。なぜ「経済学の可能性」でもなく「マルクス経済学の可能性」でもないのでしょうか。「政治経済学」はアメリカ流の Political Economy で、そう言っておけばマルクス経済学も含めてもらえる、とでもいった情けない見方なのでしょうか。それとも「政治」を誤解して、イデオロギーや運動と融合する経済学のつもりなのでしょうか。いずれにせよ、マーシャルの用語法をどうしてくれるのよと言いたくなる。私らと違って授業でマーシャルなども教わった世代が考えたことでしょうか。いっそ「エコノミックスの可能性」とやった方が良かった。もっとも、エコノミックス・経済史学会ではサマにならないか。そもそも Political economy の political を機械的に政治としか考えないからおかしいことに気がつかない。ポリスはオイコスより広い社会の意味でしょう。社会経済と訳してもさほど差し支えない。ヘッピー腰のくせに郷愁でイデオロギーや運動を匂わせたがるからマンガチックになる。可能性を追求したかったら、学の歴史をきちんと知っておくべきです。

時間目一杯しゃべりました。オチをつけなければなりません。今日の話のスタイルに関わりませんが、研究と言うものは疑問の連続です。一つ解決した時には大抵、続く疑問が、どうかすればもっと多数出てきます。それが学問というものの本質なのだろうと思います。そのことを、既に多くの

東西の先人がいろいろな風に言っていました。今日は大東流で漢学にしますと、一ナニ、近頃覚えただけなんだ一『近思録』にいわく、「学者先要会疑」学ぶ者は、まず疑問を抱かねばならない（拍手）。

言注

- (1) 本稿は、2004年1月13日に行なった退職記念講演をほとんどそのまま記録したものである。ただし、録音テープをもとにして、表現をいささか整頓した。また、神田孝平『経済小学』と福沢諭吉『西洋事情』外編は改めて原書と照合し、東欧語についての言及は新たに追加した。
- (2) 文献36.の著者。
- (3) 文献37.46ページ、なお、38ページも参照のこと。
- (4) 原田種茂「大漢和辞典と大東文化」、文献3.280～285ページ
- (5) 文献22.23.
- (6) この書名は、文献32.の、水田洋氏による introduction で初めて見た。原書名は訳本からでも推測できるが、底本名はこれまで手がかりがなかった。
- (7) 馬場 文献56
- (8) 文献33.これまで『西洋事情』は岩波『福沢諭吉全集第一巻』、『福沢諭吉 選集第一巻』に含まれていたが、この慶応大学出版会版も、一部省略はあるものの、適切な注釈・解説つきで、便利である。ただし、同書の解説347ページに、「経済」は太宰春台が「経世済民」を縮めて作った和製漢語だとしているのは大いに疑問で、「経済」の初出が漢籍にあることは『広辞苑』でも判る。「経世済民」は漢籍にあるが、さほど頻用されていたようには見えない。本稿7を見よ。
- (9) 文献33.189ページ
- (10) 文献33.351ページ
- (11) 文献2.
- (12) 文献9.の「経済」に日語とある。また、文献35.373～389ページ参照。
- (13) 高橋のこの指摘は、松川七郎の訳に、該当する原語が挿入されているので、岩波文庫本だけで確認できる。文献48,文献49を見よ。
- (14) 文献41,38ページ
- (15) 文献42.第二巻、815ページ
- (16) 文献38.
- (17) 文献43.
- (18) この点、はっきりそう述べた文章に接していないが、文献36、文献46、文献47、いずれも明確な用例を挙げていないのだから、人の知る有名な例がほとんど存在しないものと考えて良い。
- (19) 管見の限りでは戦後の研究としては文献46,文献47の、割に古い二論文があるだけである。
- (20) 文献45.

- (21) 馬場宏二「“資本家”と“企業者”」大東文化大学『経営論集』第6号、2003年9月
 (22) 馬場宏二「“経済成長”の初出」大東文化大学『経済論集』第81号、2003年4月
 (23) 文献54

文献一覽

※ 辞書・辞典類

1. 『広辞苑』
2. 諸橋轍次『大漢和辞典』
3. 『大東文化大学五十年史』
4. 諸橋轍次『中国古典名言集』
5. 近藤春雄『中国学芸大辞典』
6. 溝口雄三・丸山松幸・池田知久『中国文化事典』
7. 『キリスト教大事典』
8. 『キリスト教神学用語辞典』
9. 大東文化大学編『中国語大辞典』
10. Oxford English Dictionary
11. 『コンサイス英和辞典』
12. 『コンサイス仏和辞典』
13. 『スタンダード仏和辞典』
14. 『プログレッシブ仏和辞典』
15. 『伊和中辞典』
16. 『岩波独和辞典』
17. 『オランダ語辞典』
18. 『ポーランド語辞典』
19. 『コンサイス露和辞典』

※漢籍古典

20. 晋 葛洪 抱朴子 地真
21. 唐代 王通 文中子 礼楽
22. 宗 孫甫 唐史論断卷中 睿宗 景雲年
23. 宗 華鎮 雲溪居士終卷十八 楽論下

※経世済民から経済へ：岩波「日本思想史大系」；大滝誠一「日本経済大典」

24. 太宰春台 経済録 1729
25. 青木昆陽 経済纂要 1736
26. 中井隣善 経済要話 1795
27. 海保青陵 経済話 1806
28. 山方蟠桃 夢の代 1820
29. 佐藤信淵 経済要略 1827

※幕末の翻訳と原書

30. 神田孝平 経済小学 1867 明治文化全集 経済編
 31. 同上底本 H.Hooft Graafland, *Grondtrekken der Staathuishoudkunde* 1852
 32. 同上原書 W. Ellis, *Outline of social economy* 1850 ed., in *Western Economics in Japan The early Years*, edited and introduced by Hiroshi Mizuta, 1999, Bristle Thommes Press and Tokyo Kyokuto Shoten
 33. 福沢諭吉『西洋事情』福沢諭吉著作集第一巻 慶応大学出版会
 34. 同上・外編原書 J. H. Burton, *Political economy for use in school's and Private instruction*, 1852, W. & R. Chambers 1852, in *Western Economics in Japan* 1999
 35. さねとう・けいしゅう『中国人日本留学史』1960年、くろしお出版
- ※経済学史上の著作
36. 高橋誠一郎『経済学前史』1929年、改造社。
 37. アリストテレス、山本光雄訳『政治学』岩波文庫
 38. Antoyne de Montchrétien, *d'une traite d'économie politique* 1615: Reimpression de l'édition de Paris 1889, Geneve Slatkine Reprint, 1970
 39. ルソー、坂上孝訳「政治経済論」、白水社『ルソー全集』1979年 第5巻
 40. J. J. Rousseau, *discours sur l'économie politique* 1755
 41. メンガー『経済学の方法に関する研究』1883年、福井浩治・吉田昇三訳岩波文庫版、1939年
 42. Inazou Nitobe, *über den Japanischen Grundbesitz* 1890, 原文・邦訳『新渡戸稲造全集』1969～1970年、第2巻815ページ、第11巻16ページ
 43. シャルル・ジイド、シャルル・リスト原著、宮川貞一郎訳『経済学史』上下、1936年、東京堂原著初版1909年、邦訳底本1923年
 44. 舞出長五郎『経済学史概要』1936年、岩波書店
 45. シュムペーター、東畑精一訳『経済分析の歴史1』1955年、岩波書店、39, 369ページ
 46. 岩根典夫「モンクレチアン、「政治経済要論」における富国思想と貿易政策論(1)」関西学院『商学論究』16巻4号、1969年3月
 47. 山川義雄「アントワヌ・ド・モンクレチアンの「政治経済論」」早稲田大学『政治経済学雑誌』244～245合併号、1975年1月
 48. ペティ、『租税貢納論』1662年、大内兵衛、松川七郎訳岩波文庫 105ページ
 49. ペティ、『アイアランドの政治的解剖』1691年、大内兵衛、松川七郎訳岩波文庫133ページ
 50. ジェームズ・スチュアート、『経済学原理』1767年、中野正訳、岩波文庫1～5
 51. スミス『国富論』、1776年、水田洋・杉山忠平訳、岩波文庫1～3
 52. J. R. MacCulloch, *Principles of Political Economy*, 1825
 53. Jean Batiste Say, *Traite d'Economie Politique*, Paris 1803, Faksimile-Ausgabe 1986, Frankfurt/Main und Dusseldorf
 54. アルフレッド・マーシャル、『経済学原理』1890年、馬場啓之助訳、東洋 経済、27, 53 ページ

55. 佐々木純枝『モラルフィロソフィの系譜学』1993年、勁草書房
56. 馬場宏二『会社という言葉』、2001年大東文化大学経営研究所、49ページ
57. 馬場宏二「“経済成長”の初出」大東文化大学『経済論集』第81号、2003年4月
58. 馬場宏二「“資本家”と“企業者”」大東文化大学『経営論集』第6号、2003年9月